新春雑感

北海道医師国民健康保険組合
組合会議長　堀　江　洋　三

新年明けまして、おめでとうございます。組合員の諸先生、並びにご家族の皆様には、健やかに初春をお迎えのことと、お慶びを申し上げます。

昨17年２月の第94回通常組合会におきまして、不肖、私が組合会議長に再選され、引き続き務めさせて頂いておりますが、残された任期中も、宜しく、ご鞭撻をお願い申し上げます。

さて、皆様ご存知の如く､『春』とは太陽暦では３月から５月を指し、24節気では立春から立夏までを、そして天文学上では春分から夏至までを意味致しております。これと関連を致しまして、東風（こち）、青春、青龍、の言葉がございますが、私は正月を『初春』とか『新春』のように呼称することに、若干の違和感を抱いております。

確かに太陽暦では、正月から３月を『春』と規定致しておりますが、歴史上、或は文学上はとにかく、１世紀以上も太陽暦に馴染み、ほとんどの事業・会計年度が４月から始まっている現在、正月を季節の最初の呼称である『春』と呼ぶことは、如何なものかと、疑問を持っているわけでございます。

勿論、松飾り、年賀状、百人一首、書き初め、七草粥等、伝統的な日本文化を否定する気は、全くございません。お年玉を貰えず、上げる相手もいない僻みからかも知れませんが、『年頭』、『新年』と言った表現は認めても､『春』の表現にはどうしても今一つ、納得が行かないのです。

閑話休題。私事に渡り甚だ恐縮ではございますが、正月になると私は四つの事柄を必ず、想い出します。そして毎年、独りで過去を振り返り、喜びに浸り、同時に後悔に苛なまれます。

我が家の家系図に因れば、天正16（1588）年の正月４日朝、私の12代前の先祖＝堀江七郎中務丞景忠は、門松の陰から躍り出た、北条家々老＝大道寺駿河守の差し向けた刺客に襲われ、その生涯を閉じました。万有引力の法則で知られた英国の物理学者、アイザック＝ニュートンが生まれる、実に54年前のことです。幾星霜、昭和48年正月４日には、恰かも景忠の生まれ変わりのように、私の愛する長女が、赴任地＝遠軽の地で生まれました。しかし、その日の夕方、私を溺愛した母が、蜘蛛膜下出血の為に小樽で倒れたのです。一時は小康を保ちましたが、私が勧めた手術を受け、そのミスに因り、数カ月後に鬼籍に入りました。

加えて正月は、私の生まれ月でもあります。因みに、私は楚の詩人＝屈原（B.C.343年生）、越後の名将＝上杉謙信（1530年生）、札幌市医師会厚別区前支部長＝中野武文先生（1927年生）と、誕生日が同じであります。

そんなわけで毎年、私は正月に、複雑な想いを抱いております。中でも母の病と死は、悔やまれてなりません。僅か10歳で両親を失った母は、子として、妻として、親として、小さな満足の代償に辛酸を嘗め、末っ子の私が医師となる事だけを希望して、生きて参りました。

けれども彼女は、札幌の地下鉄に乗ることを経験せず、私の兄姉の子供の総てを抱きながら、私の子供達だけを抱くことも出来ず、私が組合会の議長に選ばれたのも知らずに、独り死んだのです。彼女の死の責任者は、執刀者では無く、私です。

でも、現在の小泉改悪の医療制度を考えれば、齢66歳で黄泉へ旅立った母は、ある意味で倖せな一生だったのかも、知れません。